

2022年度 関西学院大学総合政策学部研究会

学生地域貢献等活動助成事業

三田市農村部における関係人口創出のための

試案作成フィールドワーク

報告書

関西学院大学総合政策学部 研究演習 I-19・II-17



## 目次

### 概要

牲川 波都季 (せがわ はづき) p.3

### 報告

#### 研究演習 I-19

掛水 南帆 (かけみず なほ) p.6

谷原 妙 (たにはら たえ) p.7

山下 那南 (やました なな) p.8

#### 研究演習 II-17

尾田 基綺 (おだ もとき) p.10

高尾 匡哉 (たかお まさや) p.11

槇田 雪乃 (まきた ゆきの) p.12

山崎 辰一郎 (やまさき じんいちろう) p.15

### 総括

牲川 波都季 (せがわ はづき) p.16



## 概要

牲川 波都季 (せがわ はづき)

### 1 事業名

三田市農村部における関係人口創出のための試案作成フィールドワーク

### 2 期間

2022年9月24日(木・祝)

### 3 チーム名

関西学院大学総合政策学部 研究演習 I-19・II-17

### 4 参加者

#### 代表教員

牲川 波都季 (せがわ はづき)

#### 研究演習 I-19

掛水 南帆 (かけみず なほ)

谷原 妙 (たにはら たえ)

藤田 晴可 (ふじた はるか)

古屋 歩 (ふるや あゆむ)

山下 那南 (やました なな)



#### 研究演習 II-17

尾田 基綺 (おだ もとぎ)

高尾 匡哉 (たかお まさや)

槇田 雪乃 (まきた ゆきの)

山崎 辰一郎 (やまさき じんいちろう)

## 5 趣旨

三田市の農村部、高平地区では、いくつかの農業体験ツアーが生まれ、住民による地域活性化が試みられてきた。しかしそうしたツアーは日帰りのものが多く、宿泊を伴うものは移住促進のための民家宿泊型に限られている。繰り返しの訪問を促すことによる関係人口の増加、地域での経済活動の促進のためには、長期滞在型の旅行を促す必要がある。

本事業では、低農薬・天日干しにより付加価値を高めようとする稲作農法において、もっとも重労働の稲刈り・天日干し作業を支援するとともに、三田市内に宿泊する。三田市農村部において、若年層が農作業を支援しながら観光としても楽しむという形がいかにかにすれば可能なのかを検討し、モデルツアーを試作・提案する。



## 6 主な活動内容

### スケジュール

#### 9月23日(金)

9:30	三田駅	集合・移動
9:50	下槻瀬公会堂	準備 ※三田市下槻瀬 82
10:30	三田市高平地区	稲刈り・天日干し作業、昼食(弁当) ※三田市下槻瀬新井 1062
16:30	三田市高平地区	懇親・農家さんインタビュー
17:30	下槻瀬公会堂	片付け
18:00	下槻瀬バス停	解散

## 参考

### 高平地区の既存の関係人口増加推進の取り組み

はつか農業組合法人 <https://ameblo.jp/hatsuka-sanda/>

NPO 法人里野山家 <https://satonoyamaga.org/rakunoubu/>

地元農家によるコスモス栽培

<https://mainichi.jp/articles/20181010/ddl/k28/040/449000c>

### 関連論文

嶽山洋志, 田中康, 寺川裕子, 松原秀也, 中瀬勲, 2002, グリーンツーリズムに資する兵庫県三田市の地域資源について, 人と自然, 13号, 73-79.

牲川波都季, 2018, グリーン・ツーリズム運営農家A夫妻の他者認識——伝え合いの意志が生まれるところ, 言語文化教育研究, 16号, 96-114.



## 報告

### 研究演習 I-19

掛水 南帆（かけみず なほ）

今回、研究演習 I のフィールドワークとして、初めて稲刈りを経験した。前中さんに指導していただき、稲刈りが始まった。思っていた以上に足を取られ、稲が手に引っかかり、かなりハードなものだった。初めは、鎌をうまく使えず切りきれなかったり、何束集めたか忘れてしまったりとスムーズに作業が行えなかった。しかし、作業用の機械が進化し、なかなか手作業での経験をさせていただけるとはなないため、貴重な体験をさせていただけたと思う。

作業の休憩中には前中さんが、農家が抱える悩みを話してくださった。米の需要が少なくなっていることにより、米の価格が数十年前に比べて低くなっていることや、後継者が少なくなっていることを聞いた。米の価格に対して深く考えたことはなかったが、機械によって作業の負担が軽減しているとはいえ、作業の大変さを考えると、非常に低い価格で米が売られているのだと知ることができた。また、農家の後継者が少なくなっていることはいくつかの場面で耳にしたことがあったが、やはり農家の方から直接話を聞くことで、真剣にその現状を考えることができた。

私はこれまでもご飯を残すことはしていなかったが、農家さんの込められた思いを知り、また自分の手で稲刈りの経験ができたことによって、米に限らず食材に感謝して残さず頂くことは、当たり前なことであり大切なことなのだと改めて感じた。

谷原 妙（たにはら たえ）

9月24日に三田市下槻瀬の前中孝夫さんの田んぼに伺い、稲刈り作業を体験させていただいた。私は小さいころから街なかで育ち、親戚に農家をしている人もいなかったため、ほとんどこの日が初めての農作業体験となった。前日が雨だったこともあり、田んぼはぬかるんでいて足場が悪く、稲刈りをはじめて30分ほどで体が悲鳴をあげた。初めての経験で、前中さんに直接刈り取り方などを教えてもらい、なんとか稲刈り作業の流れをつかんだ。

休憩の中で農家の方と牲川先生の話聞いていて印象に残っていたのは、専業で農家をやっている人が非常に少ないということだった。これは、農業を始めたことで前職よりも収入が増えたと謳うここ最近の風潮と真逆の印象を受けた。三田市は、新規就農を目指す人向けに専用のホームページを設置している。[三田市, 2022]このような窓口があることを、私は調べるまで知らなかったが、農業を営む世帯が多い地域ではこのような窓口は開かれているようだ。特に三田市はホームページやその説明もわかりやすく、検索するとすぐにサイトがでてきたため、新規就農を目指す人にとっては非常に助かるのではないだろうか。三田の名産である山の芋や枝豆、もちろんお米も、農業が新しい世代へ受け継がれることで、生産され続けてほしいと思う。

#### 参考文献

三田市. (2022年5月13日). 三田市で新規就農を目指す方へ. 参照先: 三田市: [https://www.city.sanda.lg.jp/soshiki/19/gyomu/sangyo\\_shinko/nogyo\\_ringyo/nogyo/1710.html](https://www.city.sanda.lg.jp/soshiki/19/gyomu/sangyo_shinko/nogyo_ringyo/nogyo/1710.html)

山下 那南（やました なな）

祖母の田んぼで作られたお米を私は毎日食べているため、農業を身近に感じていた。しかし、農作業の経験はないため、米を作る大変さを学びたいと思い参加した。私が想像していた以上に体力がいる。何度か指導を受けたが、最後まで手際よく稲刈りをするにはできなかった。藁で稲を束ねる際も、全力で縛らないと天日干しで乾燥されたときに落ちてしまう。数えきれない稲穂をすべて手作業で束ねるのは、先の見えない作業だと感じた。貴重な体験をして、食の大切さや農業機械の便利さを改めて実感した。しかし、1日のみの体験であったからこそ、このように呑気な感想を言えるのだろう。

長年農家をしている前中さんは、昔と比較した現状を語ってくださった。機械により効率化されているという良い変化の一方で、米の値段が下がる悪い変化もあった。パンなどが普及した影響で、米の需要が少なくなったという。重労働にもかかわらず、将来収入が安定しているかわからない。このような現状では、若者も本業にしようとは思えず、家庭菜園が限度だろう。米の需要を上げることより、重労働を解消する方が後継者を取り入れる近道だと考える。農業機械メーカーのクボタは、人材不足や農業効率化に対応するために自動運転農機の開発を進めている。しかし、稲刈り機が約2100万円と莫大な金額だ。一般的な農機をレンタルする場合でも、1日でできる仕事量や農機の種類が多いことを踏まえれば、最終的な費用はかさむ。私たちがすぐに行動できることは、米に限らず国産品を食べることしかないのだろうか。家庭菜園で継続的に農業の苦勞を知ること、農業を間接的に支えるかもしれない。また、国の政策が変わったということも教えていただいたため、そちらの影響についても今後注目していく。

現状では農作業の体験事業で三田市への観光客・訪問者を呼び込むことにはつながらないと考える。ただの農作業は全国各地に体験出来るため、付加価値で如何に差別化を図るかが重要となる。それでもなお遠方者の呼び込みには限界があるため、三田市近隣の学校や幼稚園をターゲットにすればよいのではな

いか。さらに、親子体験という場で親を巻き込む方が再び足を運んでもらいやすい。農作業体験に加えて、料理店との連携で自らがとった作物（米など直ぐに調理が難しいものは過去に取れたもの）の調理体験をすれば、幼少期から食の大切さを学ぶ機会になる。その後の継続性を考えれば、旬の食べ物といった季節に応じたイベントを団体へ告知する案が考えられる。

#### 〈参考文献〉

株式会社クボタ。「農業ソリューション製品」. For Earth, For Life Kubota.  
<https://agriculture.kubota.co.jp/product/combine/dr6130a/>,(参照  
2022-10-12)



## 研究演習 II-17

尾田 基綺（おだ もとき）

今回、フィールドワークに参加して、初めて知ったことがたくさんあった。私は、三田市の隣の三木市出身で、山田錦という酒米が有名なのだが、三田の土地では食べるお米がおいしく育つという話を農家の方に聞き、実際に食べたことがないので、三田のお米を食べてみたいと興味を持った。また、今回のように本格的に稲を刈って、藁で束ねて、干すというようなことを行っていたことがなかったので、お米を収穫する過程でこのように大変な作業を行っていたんだなど改めて農家の方への感謝の気持ちが芽生えた。また、初めは苦勞したが、農家の方が丁寧に教えてくれ、最後にはやりがいや達成感を得ることができた。そして、今回は10人以上で作業を行ったので、これを一人でやると考えると大変だなと思った。しかし、地域の方々も手伝いに来たりしており、そのような地域の交流というのも三田市の農村部の魅力の一つだと感じた。今回の体験はとても貴重な経験だったし、農業を行う環境としてすごく良い環境だと感じたので、今回のような稲刈り等、農業体験のイベントなどで農業に興味のある方たちを誘致することは可能だと感じた。



高尾 匡哉（たかお まさや）

9月24日、三田の北の方の地で稲刈りを体験させていただいた。自分自身、稲刈りを体験したことはあるが、10年以上前の話なのでほとんど覚えてはいなかった。田舎育ちの自分は、田んぼには馴染みがあるはずだが、いざ体験させていただくとまったくわからないことばかりであった。何より、ぬかるんだ地面の上での作業のため足取りが常に重く、稲を刈る以前に足腰に強く疲労を感じた。次の日には、軽く筋肉痛を起こしており、トレーニングをしたような気分になった。

稲刈り自体に難しいと感じる作業は特になかったが、いくつかの束をくくってまとめる作業は少しコツのいる仕事であった。最初は強く束をまとめることができず悔しかったので、農家の人に積極的に教えていただき、最後の方には強い束をスピーディーに作れるようになった。

休憩時には、農家の方達が農業についていろいろ教えてくださった。やはり農業は力仕事で体力がいる仕事なのだなと感じた。それにプラスして天候に大きく左右される仕事であるため少し神頼みなどところがあるのもまた大変だと感じた。今回のフィールドワークで、農家の方々の努力と大変さを少しかもしれないが知ることができたため、今後の食事により感謝することができそうだ。



槇田 雪乃（まきた ゆきの）

9月24日に、農家の前中さんのご指導の下、三田市高平地区での稲刈り及び天日干し体験を行った。私は、小学校時代に稲刈り体験をしたり、実家の稲刈りを手伝った経験があったりしたこと、稲刈りや畑仕事を身近に感じていた。しかし、田んぼでの作業の経験からかなりの月日が経っていること、そして、実家での稲刈り作業が機械化されていたことから、今回の手作業での体験は日常ではなかなかできない、貴重な経験となった。特に、天日干しに関しては、刈った稲の束を思い通りに藁で縛れず、強い力やセンスが必要になった。数十年前まで、広大な田の稲を刈り、月が出る時間までそれを全て人の手で干していたと考えると、今の技術の発達は感謝すべきものであると思った。

実際の作業体験だけでなく、農家の方の声を生で聞く経験も、自らの食事や生活について考えを深めるきっかけとなった。中でも、農家の方の話で最も印象に残ったのは、3点ある。

まず1点目は、農家の苦悩である。今回の体験で、手作業の大変さや害獣対策といった農家の人たちの苦勞、そこに込める思いが読み取れた。しかし、前中さんによると、現在の米価は、数十年前のおよそ7割にまで下がっているという。日本は、日本国内で主食を賄えるはずである。しかし、人口減少やパン食への人々の嗜好のシフトを背景として、米の需要は減り、米価に影響を及ぼしている。(農林水産省, 2022)この風潮を受け、飼料米の拡大や米粉の普及といった取り組みがなされているようだ。これらの取組にもこれらにも課題があるかもしれない。しかし、農業を職としている人にとって、農作物の値段は自らの生活に直接影響を与えるもので、それぞれが苦勞して作物を出荷している。物価高の中、輸入に任せるのではなく、国の食料自給率を高めることが、国内の農家を守り、国民の食生活を守ることにもつながるのではないかと考えた。そして、私自身も、食料を買うときは、国産のものを選んだりフードロスのないように心がけたりするなど、農家の人々の苦勞を噛みしめながら食生活をしようと思う。

2点目は、昔ながらの農法は、サステナブルであるという話である。今回、稲を縛るために使用した藁は、昨年刈った稲のものだった。この藁は、昔は、天日干し用の竿の設置な

ど、生活のあらゆることに使われているという。現代の生活では、ビニールひもやロープを買ってモノを縛ったりする。しかし、里山では、自分たちの身の回りにある物を有効活用するといった、資源の有効活用を行っていた。SDGsという言葉があるが、もともとこの概念が生まれる前から持続可能な暮らしをしていた人々の暮らしから私たちが学び、取り組んでいくことも必要ではないかと考えさせられた。

3点目は、農業を行う人に対する支援である。今回の体験では、親子連れの姿も見られ、前中さんによると、彼らの中には農業のために三田市に移住してきた人もいるという。農業従事者が減少している中で、このような移住者は、後世に農業をつないでいくために貴重な存在だと私は考える。しかし、ここにも地域差があると感じた。これは私の地元の場合になるのだが、最近、農業のために移住してきた人が、とある空家をリフォームし、そこで生活しようとしているようだ。しかし、法律上の問題から、改築がスムーズに進まないことから、移住者はそこに住めず、畑作業もできない状況が続き、自治会の中でも彼らとどう付き合っていけばいいのかわからないという。これは特殊な事例かもしれないが、移住者の促進には、農業をサポートする制度や、移住者が働きながら農業を続けていけるような環境、更には、空家を買って生活するために生じる問題点をきちんと明示していく取り組みが必要であると感じた。今回の地区では、農家の方が畑を貸して、週末は移住した方が農作業に取り組むなど、きちんとした支援がついているように感じた。私たちの食卓を支える仕事が持続されるように、農業に挑戦しやすい環境を各自治体は整えていくことが必要ではないかと考えた。

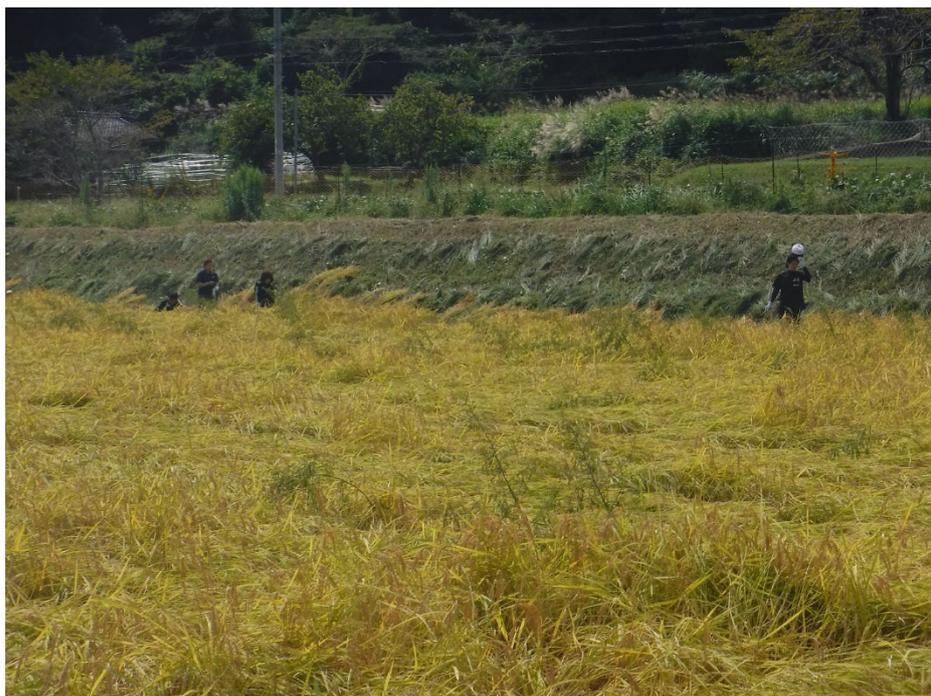
最後に、今回のような農業体験は、子どもから大人までの農業になじみのない人々が、互いに汗をかきながら収穫する体験を通じ、食のありがたさや自然の良さを体験できることが魅力である。したがって、貴重な体験活動として観光資源としての意義はあると考える。今回は、収穫に限られた作業だったが、植え付けから収穫まで一連の流れを体験できるようにすることで、更なる観光需要の増加を見込めるのではないかと考える。

加えて、体験自体が、観光に限らず、その地への移住や農業を営みたいと思う若者の増加につながるかもしれない。観光から貴重な農業従事者の確保や地方の人口流入につながるためには、移住者への多方面からの支援が行政に求められると考える。

参考文献

農林水産省(2022)「最近の米をめぐる状況について」閲覧日 2022年10月2日

<[https://www.maff.go.jp/j/seisan/kikaku/kome\\_siryou.html](https://www.maff.go.jp/j/seisan/kikaku/kome_siryou.html)>.



## 山崎 辰一郎（やまさき じんいちろう）

9月24日に牲川ゼミで稲刈り体験をさせていただいた。恥ずかしながら、田舎育ちで家の前に田んぼがあるにもかかわらず、稲刈りは初めての体験だった。午前の鎌で稲を刈る作業で感じたことは長靴と軍手を忘れた自分は農家の方々にとても失礼な行為をとってしまったということだ。生半可な気持ちで稲刈りを軽く見ていたが、農家の方々の熱心な指導や、手作業へのこだわり、「こんなに大変なのに12束の稲から茶碗一杯もお米がとれない」などの話から、力になりたいと感じ一生懸命取り組んだ。

実際、作業自体とても難しいと感じることはなく、地道な作業が好きなので楽しい時間になったが、果てしなく広がる刈られていない稲を見ると、自分は根気強くできないと確信した。

農家の方の「同じ米を作っても土地柄の日照時間や水質の違いによって日本酒向けの米になったり、もち米向けの米になる」という話が一番印象に残っており、実際に食べて違いを感じたいと思った。細かな手間も惜しまず丁寧に作業する姿を見て、日常にお米を食べることができることがどれだけ幸せな事か感じる機会になった。



## 総括

牲川 波都季（せがわ はづき）

申請時点では、1泊2日の宿泊を伴う活動を予定していた。その準備過程で、近隣のさまざまな宿泊施設を検討したが、まとまった人数の若者誰でもが安心して宿泊できる施設は非常に限られていた。三田市野外活動センターは施設の老朽化が著しく、TEMIL（元伊丹市立野外活動センター）の研修施設は早期に予約が埋まった。最終的に三田駅前のビジネスホテルを、本学との提携価格で予約できたが、一般の若者が農業体験を旅行として楽しむための適切な施設が整備されていないことがわかった。三田市野外活動センターは市が再生プロジェクトを計画しており、今後パブリックコメントなどの提出機会があれば、本事業参加学生に提出を促したい。

活動実施時点で、新型コロナウイルス感染症流行第七派が完全には終息しておらず、当初予定していた1泊二日での宿泊は取りやめ日帰りに日程を変更した。

当日は、地域の公民館施設で支度をしたあと、テントの設営、稲刈り作業・はさがけ作業についての指導農家からのレクチャー受講、作業開始、昼食、作業再開・終了、指導農家へのインタビュー、公民館での片付け・懇談という流れで、活動を行った。

一反分の稲刈りは、中心部を稲刈り機で、周囲を手刈りする必要があるが、また郷土料理店で使用するということではさがけで天日干しをする。学生と教員・農家で周囲全ての稲刈りと、半反分のはさがけ作業を終えることができた。通常は、シルバー人材センターからの派遣などで作業を行うということであり、農家は、体験事業として成立しうるということとともに、作業が非常に早く進んだことを大変喜んでおられた。

学生の中には、農業を仕事とすることに興味をもつ者もいたが、小規模経営では収支がなりたたないといったことを農家から直接聞き、職業として成り立たせることの厳しさを認識したとのことだった。それでも農家から、農産物自給率の維持の重要性、後継者が必要であることも語られ、そのことも学生にとっては印象に残ったようである。

今回の地域貢献活動は体験ツアーとして実施することで、三田市の里山地域

における農業が第三次産業としても収益を上げられるかの試行をめざしていた。農家からは、体験料金は不要でアルバイト代を出すから来年も来てほしいという声も聞かれた。第一次産業として成り立たせるための人出が足りないという趣旨であり、区域外からの若者にどのような役割を期待するのか、交流人口を増やすという目標は適切なのかについても再検討する必要がある。



